

ジョージ・エリオットの理想的自画像における悲劇

川 上 美 津 子*

George Eliot: Her Ideal Self and Tragedy

Mitsuko KAWAKAMI

(1)

ジョージ・エリオットのヒロインたちに共通するものは、彼女たちの向上心による悲劇である。それは自己の不完全さ故に完全なものを求めようとする熱望と周囲との関係から生じる悲劇的過程によって示される。彼女たちのほとんどが作者と同一視されるような悲劇的要素を内にもっている。この点で最初にわれわれの注意をひく女性は、『ギルフィル氏の恋物語』に登場するカテリーナである。彼女の中にジョージ・エリオットのヒロインたちの原点を見い出すことが出来る。

カテリーナは人の注意をひかずにはおかない「小鹿の眼のような大きな黒い眼」をした情熱的なイタリア娘である。物語の最初から最後までさけがたい「かたい鉄棒にそのやわらかい胸をぶつけ、はばたく哀れな小鳥」(Ch. 3)のイメージによって描かれている。「彼女の愛情、嫉妬、誇り、自分の運命への反逆は一つの激情の流れ」(Ch. 2)となって、彼女を悲劇の淵へと追いやる。カテリーナの心をもてあそぶ利己的なキャプテン・ワイブラウへの密かな激しい嫉妬に苦しむ若い魂は、『フロス河畔の水車屋』のマギーや『ダニエル・デロンダ』のグウエンドレンの原形といえよう。

ワイブラウとベアトリスとの婚約を知った時、カテリーナはワイブラウを殺そうと決心し、彼に会いに行くが、すでに彼は心臓病で死んで

いた。悲痛のうちに家出をしたカテリーナは、ギルフィルの誠実な愛情によって、最後には精神的回復をえて、彼女の短い生涯を終えるのである。カテリーナの物語に関する限り、プロットもキャラクターも単純であり、後の小説にみられるような社会的、倫理的に複雑な問題も提示されてはいない。しかし注目すべきことは、ジョージ・エリオットの悲劇の根底をなす「激しい性格と平凡な環境のコントラスト」が、すでに初期の作品に明示されているということである。南国の情熱的な血とイギリスの風土とのコントラストからくるカテリーナの悲劇は、平穏な日常生活の中で、それが与えるものに満足出来ず、それ以外のものを求めようとするところにある。カテリーナは養父母の認める誠実なギルフィルとではなく、ワイブラウとの結婚を密かに熱望する。彼女の内的葛藤はマギーにおいて更に複雑に展開し、そしてグウエンドレンにおいてその殺意がもっと微妙に示されることになるのである。

(2)

マギー・タリヴァーの苦悩はあきらかに内と外の世界との亀裂から生じる。これはまた若い頃の作者自身の苦悩でもあった。マギーの最初の悲劇は兄トムとの不和によるものである。感受性が強く、より高いものを求めようとする情熱的なマギーに対して、トムは鈍感で、想像力に乏しい。この性格の相違が子供時代のマギーに種々の悲しい出来事をひきおこすことにな

昭和59年11月5日受理

* 一般教育部助教授